

成果の説明書

(氏名)片岡 美喜	(学部)地域政策学部
<p>1 重要事項</p> <p>1. 研究成果</p> <p><論文></p> <p>片岡美喜 (2018)『経営戦略論にみる農業・農村における社会貢献型事業の展開方向』『農業経営研究』農業経営学会 56(1): 査読あり</p> <p>本論文は、近年農業・農村にみられる社会貢献型事業を対象に、経営戦略論を適用し、その運営論理や有効性について論じている。農業・農村における社会貢献型事業の背景となる理論を時系列に紹介したうえで、経営戦略論を適用した事例分析をもとに考察を行った。その結果、経営戦略に社会貢献要素を加え、それを事業化したことは各経営にとっての革新性と事業の付加価値を高めるものとなっていることが確認できた。</p> <p>2. 教育活動</p> <p>本ゼミナールは、群馬県農村整備課事業やま・さと応縁隊事業に採択され、(株)片品村振興公社の全面的な協力のもと、同村を中心とした農業・農村振興を目的とした地域調査や観光活動への支援事業を実施してきた。平成31年度も採択を受け、3年生を中心とした教育・研究活動を進めてきた。今年度の学生による研究・地域支援活動は、平成31年7月に道の駅尾瀬かたしなと同施設に併設された農産物直売所の開設に伴い農産物直売所や農業の6次産業化に焦点を当てた活動を行った。</p> <p>農産物直売所を研究テーマにしたグループは、現状の直売所の利用とその担い手は高齢層が多いことに着目し、直売所の売り手と買い手となる層として20代30代の「若者層」をいかにすれば取り込めるのかという課題について実地調査から検討を行った。もう一つのチームは、農業の6次産業化に関心を持ち、農産物加工所を地域住民が活用するための方策について実地調査に加えて、自分たちが実際に農産加工を行い、利用促進を図ることを目的とした研究・実践活動を行った。</p> <p>上記の研究テーマに基づいて、平成31年度に学生たちが行った主な活動を3つ紹介したい。第1に、道の駅尾瀬かたしなの開業時に行った新商品の試食配布とアンケートの実施への協力である。同村の特産品のひとつである「太白大豆」を使った新商品となるスイーツについて、味や改善点、購入意向を来訪者に問うアンケートの設計、当日の試食・アンケートブースの開設を本ゼミの学生が行った。このアンケートには、同直売所の許可を得て自分たちの研究に関する調査項目も盛り込ませていただいた。当日は早朝から準備を行い、来訪者の時間帯を分けて、試食コーナーの運営とアンケートの実施を行った。アンケート結果に偏りがでないように、老若男女の配分を考えながら声をかけて試食とアンケートのお願いをしようとしたが、知らない方に声をかけて協力していただくことは、学生にとって社会経験のひとつとなった。アンケート結果を集計・分析したものは、直売所の方に見ていただき実際の販売を行う検討材料としていただいた。</p> <p>第2に、日本政策金融公庫前橋支店統合10周年記念事業として「ぐんま観光の魅力と可能性」と題した講演会と商談会に参加し、本ゼミ生は研究発表と商談会への協力をさせていただいた。商談会では、道の駅尾瀬かたしなの直売所店長である方とともに、同道の駅や片品村で扱う農産物や観光に関して、関連業者の方に対するPRの協力を行った。観光関係の事業に関わる社会人の方達に対して、片品村特産のトマトジュースの試飲提供と説明を学生らも行った。また、当日は片品村特産の花豆を使ったせんべいを学生らが開発し、試食とその味などに対するアンケートを実施する予定であった。前日に作成したそのせんべいは、湿気をなるべくとるようにしていたが、焼きたてと違い噛みきれない硬度となってしまい、お客様には限定して提供することとなった。商談会とい</p>	

う学生では参画しづらいイベントで社会人の方と接すること、一部失敗した経験は学生にとって大きな糧となった。

第3に、五大学合同ゼミにて他大学との研究交流と実地調査を行ったことが挙げられる。同ゼミは、本学、和歌山大学、広島大学、広島修道大学、琉球大学の近しい研究領域のゼミナールで毎年合同の現地調査や研究交流を行うもので、10年以上継続している活動である。平成31年度は広島大会が行われ、夏の集中豪雨後で大変な時期であったにも関わらず是非来て欲しいと歓迎してくれた広島県世羅町へ訪問した。同ゼミでは、世羅町のグリーンツーリズム事業の調査を行い、学生らは農家の方のお宅に分宿させていただいて、地域の現状をお教えいただいた。これらの活動や交流からは、グリーンツーリズムへの実体的な理解とともに、地域が直面する課題を現地の人から詳細にお伺いする機会となった。ここでお教えいただいたことが、学生らのその後の研究への認識の醸成につながり、世羅町のみならず地域社会になんらかの還元を行うことができないかと考えるきっかけとなった。

3年生らは、これらの実践や現地調査、県内での調査を踏まえ、12月に滋賀県で開催された第10回全国エコツーリズム学生シンポジウムにて報告を行った。このシンポジウムでは、滋賀県知事に研究報告に関する質問をしていただくなど、学生にとって緊張する場面もあったが、他地域の大学生やエコツーリズム実践家の方々からのアドバイスや情報交流ができる機会となった。また、2月に群馬県庁で行われたやま・さと応援隊シンポジウムでは1年間の活動成果の報告を行い、成果を広く公表することに努めた。今年度の活動を通して、学生らは農業・農村の現状を知ると同時に、実践活動を行うことで6次産業化や観光地域プロモーションの難しさ、やりがいを体感し、それらが地域において何らかの一助になることにやりがいを感じる結果となった。現在4年生となった彼らは、卒業論文や就職活動を行いつつも、継続して直売所での新商品開発や、農産物加工所の利用促進活動に関して活動を継続しており、今後の成果が期待される

3. 学内業務

観光政策学科長の任期の最終年度として、ホスピタリティ実習の企画および運営、講義実施、リレー講義の企画と講師依頼などに尽力した。

4. 社会活動

1) 各種委員会

- ・国営土地改良事業計画に係る専門技術者（関東農政局）
- ・群馬県情報公開審議会委員
- ・群馬県環境審議会委員
- ・群馬県卸売市場審議会委員
- ・農林水産政策科学研究委託事業研究課題審査委員、評価委員（農林水産政策研究所）
- ・地産地消コーディネーター（一般社団法人都市農山漁村交流活性化機構）
- ・内閣府総合特別区域の専門家評価に係る委員
- ・「尾瀬の郷片品」むら・ひと・しごと創生本部 有識者会議委員

2) 学会活動

- ・日本農業経営学会 編集委員

2 その他の事項

3 次年度以降の計画・抱負

次年度以降の抱負として、これまでの研究成果を踏まえ、さらに理論面、実証面を充実させた研究報告、論文執筆を行うことである。